Title	ハンス・ヴィルグラー著 古典学派批判者としてのマルサス
Sub Title	Dr. Hans Würgler ; Malthus als Kritiker der Klassik : ein Beitrag zur Geschichte der klassischen Wirtschaftstheorie
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1959
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.52, No.9 (1959. 9) ,p.810(62)- 814(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19590901-0062
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19590901-0062

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「理論なき虚無主義者」麻生久の姿であった。

本書は、日本社会民主主義運動の指導的な人物として、大正から昭和にかけて活躍し、数奇な生涯を辿った麻生久のきわめて包括的な伝記である。資料的な面で、非常に重要なものとなるが、また叙述において、つとめて客観性を保持すべく努力している点に敬意を表する。しかしながら、本書の一大欠点は、過去の社会民主主義運動の失敗と錯誤を率直に反省することなく、ともすればこれを正当視し美化しようとする傾向がみられることである。本書は何のためか書かれたのであろうか。もしたんなる追憶のためであるとすれば、それでもよいかもしれない。しかし「階級政党か国民政党か」という議論が喧しく叫ばれる今日、この書が現われた意義は、一個人の伝記としてより以上に、日本社会党の将来のあり方にたいして、かつての社会大衆党の運命が示唆するところのものを、深刻に検討し、反省するところにあるのではないだろうか。率直に云って、筆者は、本書が、いまは日本社会党の幹部で、戦前からの無産階級運動の闘士であった方々によって書かれ、帝国主義とファシズムと闘った尊い経歴をもっておられる方々によってまとめられながら、本書に分析的な批判と反省の精神があまりにも稀薄であることを指摘しないわけにはゆかない。この点を別とすれば、本書が日本社会運動の一断面を描いたユニークな力作であることは云うまでもない。
(麻生久伝行委員会、定価千円) (飯田 豊)

ハンス・ヴィルグラー著
『古典学派批判者としてのマルサス』
(Dr. Hans Würgler; Malthus als Kritiker der
Klassik. Ein Beitrag zur Geschichte der klass-
ischen Wirtschaftstheorie, Winterthur, 1957.)

マルサスの「人口論」については、実に多くのことが語られてきたのに、その「経済学原理」は、人口論の圧倒的な影響のかけかかれて、ほとんどかえりみられることがなかった。同じ著者の手になる重要な二著が、かくも異なった待遇を受けたことは奇妙な対称をなすが、この長い忘却の淵から「原理」を救い上げたものが、マルクスとケインズであったということは、一層興味深い事実である。

もちろんマルクスは、マルサスの地主的、弁護論的、反動的性格を攻撃し、その皮相的な、非科学的な方法論、流通主義、資本と商品の混同などを非難した。だが同時に、マルサスの「ある程度の理論的せんさく心」を認め、剰余価値説との関連における支配労働価値説の積極面を見出し、一般的過剰生産の可能性を強調して「ブルジョアの生産の諸矛盾を暴露することに関心をもち」た点を正当に評価している(『剰余価値学説史』第三巻参照)。

これに対してケインズは、マルサスを「ケンブリッジ学派経済学者の最初の人」とし、「もしもリカードウの代りに、マルサスが一九世紀の経済学の源流であったならば、今日世界はどれほどより賢明な、より富める場所となっていたことであろうか!」と賞讃の言葉を贈っている(『伝記小論集』参照)。彼は方法論においても、有効需要論においても、マルサスと似たものを持ち、マルサスを自説の先駆者と信じていた。両者の相似は、単なる偶然ではなく、両説の生れた社会的状況、両者の階級関係の相関性などを考える時、興味ある問題となる。

ここに紹介するヴィルグラーの著作は、マルクス、ケインズ双方の説を批判し、マルサス経済理論の研究に独自の見解を示そうとするもので、次ぎのような構成をとっている。

- 第一部 社会経済学における古典の概念
 - 1 学史の一般問題の考察
 - 2 古典の概念の起原
 - 3 古典時代の現代的把握
 - 4 古典派、古典派体系についてのわれわれの見解
- 第二部 古典派体系の基礎に対するマルサスの説
 - I 価格理論
 - 5 価値、価格の定義
 - 6 財の価格形成

- 7 価格決定
 - (1) 需要の強さ
 - (2) 生産費の役割
 - 8 生産要素の価格形成
 - II 「セー法則」論争
 - 9 セーの「販路法則」
 - 10 「セー法則」の解釈
 - (1) 一般均衡傾向の主張としての「セー法則」
 - (2) 貯蓄—投資均衡の主張としての「セー法則」
 - (3) 経済発展のヴィジョンの表現としての「セー法則」
 - 11 「販路説」に対するマルサスの批判
 - III 批判的見解の結合と評価
 - 12 価値と富の定義について
 - 13 富の増大
 - 第三部 学史におけるマルサスの位置
 - 14 マルサスの位置の変遷
 - 15 マルサスの経済理論の特色
- 著者は「マルサスの経済理論」の研究において、彼を古典学派の批判者、新しい理論体系の創造者と考え、そのために古典派体系の基礎、特に「セー法則」の理解を求めている。
【第一部】古典学派については今日次ぎの四つの主要な解釈がある。

(1) 一七七六年から一八四八年の時代に完成したとみられ、この時代の終りに真実で覆えし得ないと信じられた経済理論の学派。(Schumpeter)

(2) スミスからピグーまで。経済の中に完全雇用—価格—均衡の傾向が常に存在するという観念がその特徴。(Keynes)

(3) 重農学派からスミスとその後継者まで。(Meek)

(4) 古典学派の下にリカードゥ理論を理解し、リカードゥを、ミスによって基礎づけられた経済理論の天才的完成者とみなす。ここでは基準としての価値—価格論、分配論が決定的な意味をもっている。(M. Bowley, Davenport, Marshall, Harvey)

彼は後の三説を斥け、大体シュンペーターの説をとり、一七七六年から一八七〇年までを古典学派の時代として、一八四八年を、古典学派内部の危機の年でありまたその最高の時と考え、次ぎのように結論する。

- 1 客観的な価値—価格理論とセー法則は、古典学派の基礎である。
- 2 古典学派とは、この基礎の上に、一七七六年から一八七〇年に至る時期において、完全な自由競争原理と私有財産制度を特徴とする経済分析の理論体系をつくった著作家たちである。
- 3 古典学派系は、スミス、リカードゥ、J・S・ミルの学派を通じて、ある問題においては互に異なった、特殊な発達をとげ

かなる潜在的原因をも予感していなかった。一方ケインズは、有効需要を彼の理論の中心たらしめ、それによって生産の役割を軽視したのである。

「セー法則」は、貯蓄と投資の均衡を「長期」において意味し、窮極的には、国民所得の増大は貯蓄の機能であるという考えが隠されている。そこで、経済成長についての現代動態経済学の完成は、「セー法則」をより精密に解釈するの役に立つであろう。

マルサスは、ただ特定の貯蓄のみが最大限に福祉を増大し、人は出来るだけ大きな国富を求めるのに多くも少なくも貯蓄できることを明らかにすることによって、この貯蓄が富を増大する働きを相対的なものにした。マルサスの偉大な業績は、ただ貯蓄の一定の大きさのみが—どれだけかということはいわれないが—国民経済にとって不測の最大の富増大を可能ならしめるということ、確信をもって明らかに示すことによって、スミスの理論を相対化したことである。疑いもなくマルサスは、生産は需要を作るということは正しいが、全ての生産がそれ独自の需要を作るという主張は誤りだと示すことに成功した。

【第三部】 古典学派の人々は、彼を「人口原理」の著者として称賛した。彼等は彼の人口論を是認した。彼を地代理論の共同の発見者とみなした。だが彼のその他の著作をあまり重要視しなかった。しかも彼らは、彼の中に、誤れる価値論、貯蓄についての支持しがたい見解、穀物関税の不可能な弁護以外のものを見なかったのである

だが、しかし常に、絶対的に正しいとみなされた(S. 33)。このような考え方は、彼によれば、決してマルクスの解釈を軽んじたのではなくて、それを修正したのである。彼にとっては、リカードゥと「俗流経済学」の区別は、古典学派として一緒に見られないほど重要なものではない。

【第二部】 学史においては、現代の理論に含まれているような考え方の発展がわれわれの関心と呼ぶので、今日重要でもなく、正しいとも考えられないものは、もはや魅力がない。昨今の論争においては、次ぎの二つの問題点が注目される。

- 1 物的財と生産要素の価格形成の微視的分析。
- 2 国民所得の高さと変動の巨視的分析。

価格理論と景気理論は現代理論経済学の最も重要な関心事であって、われわれが古典学派の基礎に選んだ定理は、この両方の考えを表わしている。リカードゥとマルサスは、社会的生産の分配の法則性を巨視的分析を通じて究明しようとし、その場合「需要の強さ」という概念は、マルサスによって経済理論体系の核心となった。このことは、彼の「セー法則」に対する考えをみることによって、さらに明らかとなる。

「セー法則」を、一般的な均衡傾向の主張と解釈することは不十分であり、貯蓄と投資についてのケインズの分析も、また「セー法則」の本来的な意味をつかみ得ない。セーは、彼の考えの主要点を生産に置き、需要を与えられたものと考え、そして一般的過剰生産のいふけれども、経済学の発展は、客観的な価値論と「セー法則」という古典学派の二つの基礎に対するマルサスの見解は、正当で有効な批判として解釈されるべきことをわれわれに教える。

価値—価格理論については、われわれはマルサスをマーシャルの先駆者とみる。「セー法則」批判と富の発展の理論については、彼は—短期貯蓄分析において—ケインズの先駆者であり、そして—成長理論において—ハロッド、ドーマーの重要な先駆者なのである。経済学史において、マルサスの活動と名声の輝く光は、人口理論家マルサスの手から、経済理論家マルサスの手へ移ったことをわれわれは認めねばならぬであろう。

* * *

ヴィルグラのマルサス観は、マルクス、ケインズとも異なり、シュンペーターのそれに近い。だがシュンペーターが、価値論を中心として「『国富論』の理論をリカードゥによる改訂とは全く別個のもののように改訂した経済理論の体系の著者としてのマルサス」(「経済分析の歴史」3)を強調したのに対して、「セー法則」をめぐる貯蓄と投資の理論に重点を置き、スミス理論の相対化と現代理論への傾斜にマルサスの主な功績を見ようとしている。そして「セー法則」の解釈においてケインズを批判し、独自の見解を示しているが、そこでは次ぎのことが問題となろう。

第一に、「セー法則」が客観的価値論と並んで古典学派の本質をなすという点であるが、これについては、ミークのリカードゥをめぐる

る研究「The Decline of Ricardian Economics in England」
 (Economica, Feb. 1930. 吉田洋一訳「イギリス古典経済学」一九
 五六年所収)があり、そこではリカードゥにおける「Mセー法則」は、
 リカードゥ体系の「基礎的前提」(ケインズ)ではなく、リカード
 ムの利潤率低下のシエーマの確証として利用されたに過ぎないと主
 張されている。この場合、「Mセー法則」は地主的なマルサス理論に
 対して、合理的なブルジョア秩序の確立という進歩的な役割を果し
 ているのであって、同じ法則でもリカードゥ学派における弁護論的
 反動性とは区別して考えられねばならない。その認識がないと、い
 わゆる俗流経済学と古典派経済学の区別があいまいとなり、古典派
 経済学を生み出した特殊な階級関係よりは、単に年代による区分が
 重要視される。

第二に、ヴィルグラーによるマルサス復興の意図は、特に現代理
 論との関連において鋭いけれども、単にマルサスを近代理論の先駆
 として評価するのであれば、結局ケインズと同じ目的論的接近に終
 って、マルサス理論の当時の社会に与えた役割や、その理論の欠陥
 に対する検討がおろそかになる。学史の研究は、単に分析用具の発
 展をたどるのではなくて、ある経済学がその時代の社会経済史的背
 景の中に成立する根拠を明らかにすることであろう。

第三に、それと関連して、マルサス理論の強調はそれ自体として
 もちろん有意義であるが、これが「人口論」との対立意識において
 のみ行なわれると、全体としてのマルサスの思想が分割され、全体

の中における「原理」の位置が客観的に評価し得ない。問題は、
 「人口論」と「原理」の相互関連を具体的に描き出して、両者の意
 味を統一的に理解するところにある。

方法論と階級関係をめぐるマルサス対リカードゥの問題は、単に
 一九世紀においてのみならず、実に今日の課題でもある。その研究
 は、単に産業革命後期の複雑な社会と、そこに生まれた思想や理論
 の役割を教えるだけでなく、今日の二つの経済学の対立が含む問題
 を、その原基形態においてわれわれに示してくれる。マルサス理論
 を詳しく検討する時、リカードゥに対する方法論上の劣位にもかか
 わらず、その反動的性格にもかかわらず、むしろその俗流性の故に、
 リカードゥの見落した重要な指摘を多く含んでいることに気付くで
 であろう。リカードゥ理論の批判的検討のためには、このようなマル
 サスの功績の評価が不可欠である。そのことは、また今日における
 近代経済学とマルサス経済学のとりの扱いにも重要な示唆を与えるで
 であろう。リカードゥ全集の完成によって、リカードゥ理論の新たな
 研究段階が始まるうとしている時、マルサス経済理論研究の水準
 も、同時に高まらなくてはならない。

(白井 厚)

儀我壮一郎著

『現代中国の企業形態』

資本主義の経済学がイギリスの古典学派以来二〇〇年に近い歴史
 を持ち、アメリカの経営学が五〇年をこえる年月を経ているのに対
 し、社会主義企業経済学の歴史は二〇年に満たない、と言われてい
 る(海道進『社会主義企業経済学研究』)。その分析対象の若さは別
 としてもたしかに「社会主義企業の内外部構造と管理機構、社会主義
 企業に関する諸経済法則、社会主義企業経済学の対象と方法などに
 ついて多くの討論が行なわれ、問題が解明されつつある」(『現代中
 国の企業形態』序文)が、一つの体系をなすまでには至っていない。
 これらの研究を推進するためには、なによりもまず現存する社
 会主義企業の形成・発展の過程が各国毎にそれぞれの条件において
 検討されねばならない。その生いたちを知るものはその本性をも
 知るからである。

本書は、社会主義的改造に独創的方式をとった中国における社会
 主義企業の形成・発展過程——とくに特徴的な民族資本的私営企業
 の国営企業への漸次的転化、農業、手工業などの小商品生産者の協
 同組合企業への転化過程——の詳細にわたる実証的研究である。著
 者は明確な方法論に立って、社会主義経済への移行、建設の一般的

書評及び紹介

法則を、たえず具体的な諸事象の背後にみとりつつ、その歴史的特
 殊性にもとづく中国独自の、多様な要素を含む社会主義企業の形成・
 発展の様相を適確に整理、解明する。従来ともすれば諸事象に密着
 した個別的考察や、抽象的な方法論的研究に力点がおかれがちであ
 ったのに対して、この事実の理論的構築——それ自体方法論の提示
 でもあるが——は、現代中国経済研究における一つの画期といわれ
 ばならないであろう。

内容は、第一部 国民経済復興期における企業形態の考察、第二
 部 第一次五ヶ年計画期における企業形態の考察、とから成るが本
 文に先立つ序章「中国における過渡期の特質と企業形態」で解放前
 における中国の産業構造と企業形態の特質を検討することから、
 解放後の過渡期における社会主義企業形成の規定的条件の析出を行
 なう。ここでは、農業における「封建的・地主的土地所有」と外国
 帝国主義による中国経済の「半封建的・半植民地的性格」の故に集
 中・集積を阻まれて、「買弁的・封建的国家独占資本」の下に萎縮
 を余儀なくされた「民族資本」の在り方が明らかにされる。最も普
 及していた企業形態、「合股」における資本集中の限界と、株式会
 社への形態転化の困難さの解明は、社会主義企業形成の中国の独自
 性を理解する上に重要である。

第一部、第一章「私営企業の特質とその変化」では、解放直後工
 業総生産額中六三%を占めておりながら、社会主義的改造の対象と
 なるべき私営企業が資本主義的工商業の質的变化を意味する国家資

六七 (八一五)